

日本植民地文化運動資料 6 [第二期]

中國文化情報

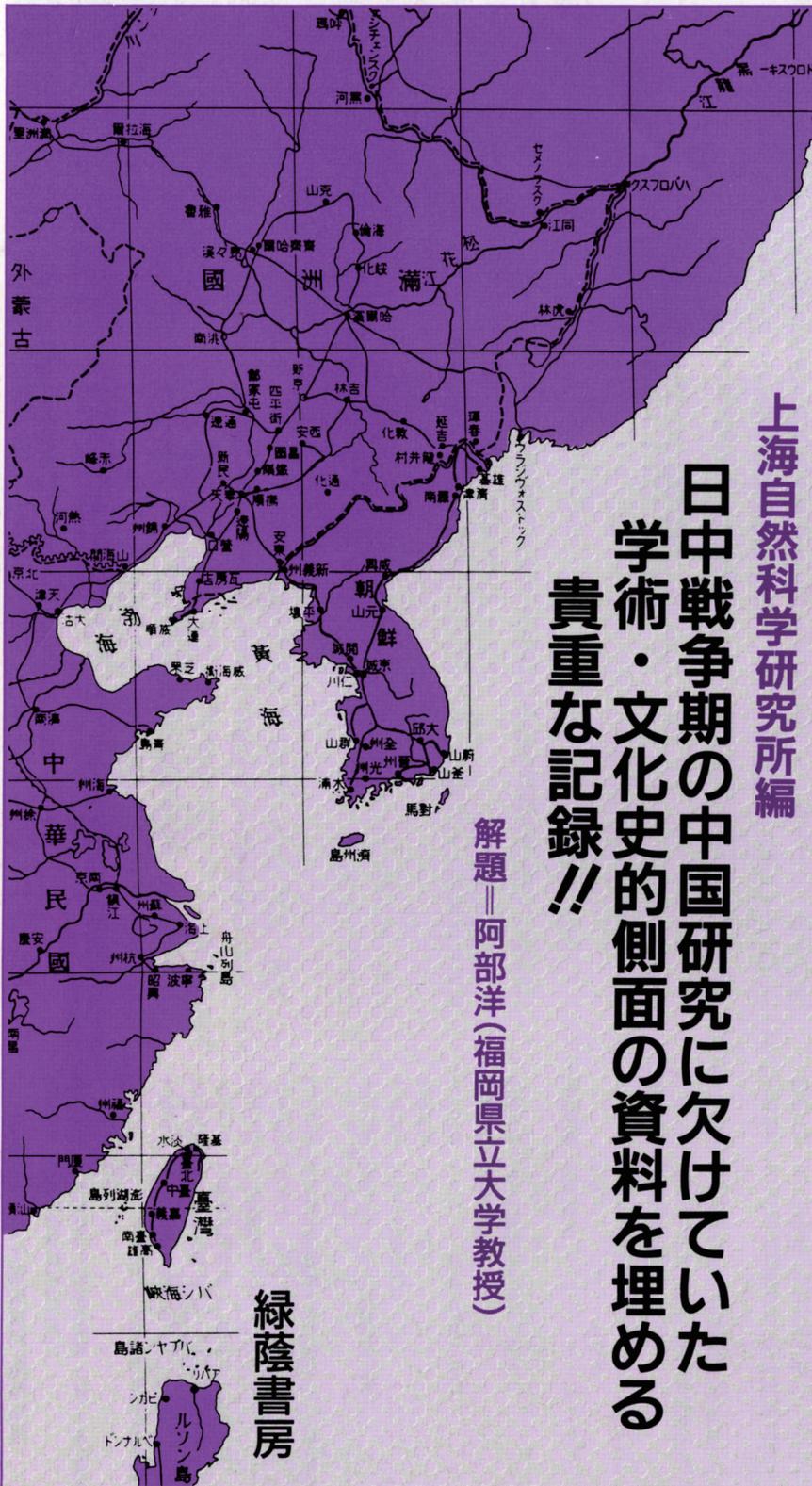
全6巻
別冊1

上海自然科学研究所編

日中戦争期の中国研究に欠けていた
学術・文化史的側面の資料を埋める
貴重な記録!!

解題 阿部洋(福岡県立大学教授)

緑蔭書房



『日本植民地文化運動資料』第二期「刊行にあたって」

近年、日本植民地の研究は質量とも大きな発展を遂げつつあるが、まだまだ政治・経済的側面への偏重は否めない。より構造的に浮き彫りにするためにも文化史的な視点からの分析が必要である。本資料集の刊行は植民地研究の上で、これまで不十分であった文化運動関係の資料を提供しようとするものである。

本資料集が対象とする地域は、戦前・戦時中、日本が植民地としていた地域及び占領地域である。また対象とする分野は新聞・雑誌・放送・映画・図書館等の諸メディアから教育、文芸、言語、都市計画・建築、社会・生活改造等である。

本資料集はまず第一期として、日本植民地下でのような知の集積がなされていったのか、それが最もよくわかる図書館資料を刊行し、お蔭様で好評を得た。ひきつづき第二期として、第六集と第七集を刊行する。

第六集『中國文化情報』は、日中戦争下の日本の对中国文化活動を反映した資料で、結果として当時の中国の学術・文化動向を克明に記録した貴重な資料となっている。

第七集『協和運動』は「満洲」における日本帝国主義の中国民衆統治の理念と実践を反映した資料で、「満洲」史研究に欠かせぬ第一級史料である。

『中國文化情報』復刻にあたって

『中國文化情報』は一九三七年、日中全面戦争に突入する直前の五月に創刊され、四一年一二月まで全三十一号が刊行された。本誌を刊行した上海自然科学研究所は、一九二〇年代から三〇年代にかけて日本が中国に対して行なった大規模な学術文化交流事業即ち「対支文化事業」の一環として、義和団賠償金をもとに、一九三一年に設立された。同時期に設立された東亜同文会や北京人文科学研究所とともに、戦前の中国における日本の文化活動の拠点の一つで、とくに自然科学に関する代表的な研究機関で、終戦までの十一年間にわたり、活発な調査研究活動を展開し、多くの業績を残した。

こうした中で、本誌は中国の社会、学術、文化の調査を目的として刊行された。とくに科学関係の新しい情報を系統的かつ豊富に収集したことは本資料の大きな特色の一つである。更に日中戦争下の日本の对中国文化活動の状況、蒋介石重慶政権下・日本の傀儡政権下の教育動向、社会科学の動向や中国文化界の動静を知る貴重な資料を収録している。

近現代中国の教育史、科学史、文化史や日中関係史、植民地研究に広く寄与するものと確信するものである。

『日本植民地文化運動資料』関係年譜

- 明治39年 南滿洲鉄道株式会社創立
- 明治40年 満鉄調査部に図書室設置(後の大連図書館)
- 明治43年 韓国併合
- 大正3年 奉天 長春など八ヶ所に図書閲覧場設置
- 大正4年 第一次世界大戦勃発
- 大正5年 列車文庫設置
- 大正7年 南滿洲司書会成立『南滿洲司書会雑誌』創刊
- 大正8年 大連図書館創立
- 大正9年 朝鮮三一運動
- 大正9年 奉天簡易図書館を本社直営とし、奉天図書館に改称
- 大正11年 衛藤利夫、奉天図書館長に就任
- 大正12年 哈爾濱図書館設立
- 大正14年 『書香』創刊
- 大正15年 柿沼介、大連図書館長に就任
- 昭和3年 張作霖爆殺
- 昭和4年 満鉄図書館業務研究会開始
- 昭和6年 『書香』復刊→19年休刊
- 満洲事変
- 前線兵士への陣中文庫開始
- 上海自然科学研究所設立
- 満洲国建国
- 昭和7年 満洲国協和会(のち「満洲帝国協和会」)設立
- 『全滿24図書館共通滿洲関係漢書件名目録』刊行
- 昭和10年 朝鮮総督府図書館報『文献報国』創刊→19年廃刊
- 昭和11年 奉天図書館『収書月報』創刊→18年休刊
- 昭和12年 『中國文化情報』創刊→16年終刊
- 日中戦争始まる(7月)
- 満鉄附属地の行政権を滿洲国に移讓
- 『図書館新報』第2次創刊、17号より『滿洲讀書新報』と改題
- 昭和13年 新制図書館研究会第一回委員会開催
- 昭和14年 大調査部体制となる
- 昭和16年 『協和運動』創刊→20年終刊
- 昭和17年 哈爾濱図書館『北窓』創刊→19年休刊
- 満洲国図書館協会発足
- 昭和20年 満鉄調査部事件
- 日本敗戦



上海自然科学研究所のスタッフ（昭和11年）
前列中央が新城新蔵所長

本誌は自然科学、人文科学の双方にわたり、

發刊ノ辭

苟モ自ラ文化機關ヲ以テ任ズルモノ、其目的トスル所ハ、必ズヤ廣ク世界人類ノタメニ、文化ノ向上發展ニ資セントスルモノデアルコトハ言フマデモナイ。從ツテコノ廣大ナル共同目的ヲ達成センガタメニハ、アラユル文化機關ハ、常ニヨク相提携シテ協力シ、互ニ情報ヲ交換シテ有無相通ジ、以テ無益ノ重複ヲ避ケ、文化機關總體トシテノ能率ヲ高ムルコトニ努メナケレバナラヌノモ亦當然デアル。

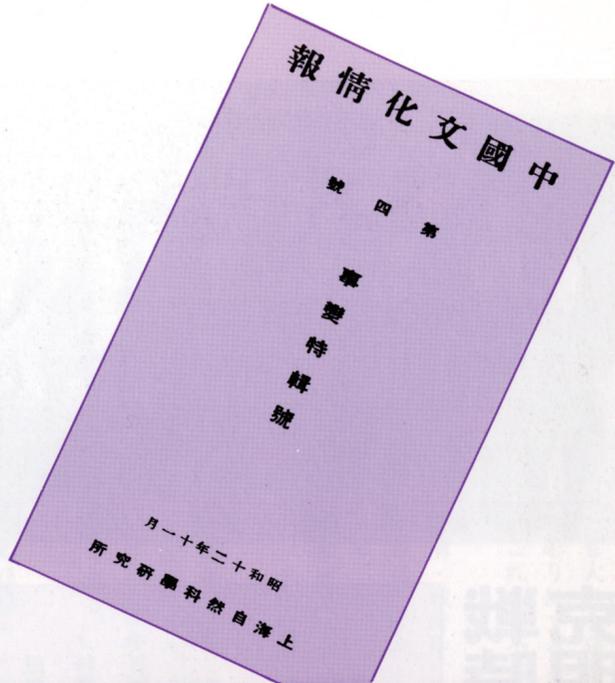
近年、中國ニ於ケル文化機關ノ發達ハ頗ル著シク、眞ニ「士別三日、即當刮目相待」ノ概ガアル。コレヲ近クシテハ東亞ノ科學的研究ノタメニ、コレヲ大ニシテハ世界的文化發展ノタメニ貢獻スル所決シテ尠少デハナイ。コレ我方研究所ガ、其中日兩國間ニ於ケル國際的文化機關タル立チ場ニ顧ミ、自ラ進ンデ、中國文化情報、及ビ中國雜誌目次索引ノ兩誌ヲ發刊シ、以テ大方文化諸機關相互ノ參考ニ供セントスル所以デアル。

昭和十二年五月

上海自然科学研究所所長

新城新蔵

戦時下中国の科学、教育、文化、學術情報を
克明に伝えた稀有な學術資料！！



すいせんします(順不同・敬称略)

戦時下中国の文化動向・教育界の研究に貴重な資料

山根幸夫

(東洋文庫研究員・東京女子大学名誉教授)

『中国文化情報』は上海自然科学研究所によって刊行された情報誌である。上海自然科学研究所からは機関誌として『上海自然科学研究所彙報』および英文ジャーナルが出版されていたが、これらは自然科学の学術誌である。これに対して『中国文化情報』は、自然科学、人文科学の双方にわたって、中国の文化、学術情報を広く紹介し、ひいては日中文化・学術交流に役立てんとしたものである。本誌が創刊されたのは、日中戦争の勃発する直前であったが、わが国の敗戦まで、継続して発刊されたことは立派である。しかもわが占領地域だけでなく、重慶政権下の情報をも伝えている。

その内容は当然自然科学分野に重点がおかれているが、多数の研究機関、大学、学生、教育、一般文化機関、博物館、図書館などの情況をはじめ、科学界の展望にまで及んでいる。わが国では比較的資料の乏しい、この時期の文化、学術情報を盛った本誌は、戦時中における中国の文化動向や教育界に関する研究に、実に多方面の資料を提供してくれる。本誌の復刻を試みられた緑蔭書房の功績はまことに大きいといわねばならぬ。

困難な時代の中国の科学・学術・文化に関する豊富な情報源

平野健一郎

(東京大学教養学部教授)

上海自然科学研究所のことを私に教えて下さったのは、十年ほど前の科学研究費特定研究「アジアにおける文化摩擦」で一緒にさせて頂いた阿部洋先生と、阿部先生の妥協を知らない調査研究でした。阿部先生のご奮闘が緑蔭書房の協力を得て、『中国文化情報』の復刻として実ることを大変嬉しく思います。

この雑誌を発刊した当時の所長、新城新蔵は、日中戦争期の上海にあって、軍事協力 の要請を拒否し、純粹研究を貫きました。中国の図書が戦火に散逸しないよう奮闘したことでも知られる新城は、阿部先生を彷彿させる、その徹底的な学問的態度によって、後世のわれわれに貴重な学術資料を残してくれました。それが『中国文化情報』であり、『自然』です。もっとも困難な時代の中国の科学・学術・文化に関する豊富な情報が残されているとは思ってもよらないことですが、それが『中国文化情報』にはあるのです。

新城は「広く世界人類ノタメニ、文化ノ向上発展ニ資セン」という気概をもって上海自然科学研究所を導きました。混沌とした世界の中、学問のありかた、文化交流のありかたについてもこの雑誌は多くのことを教えてくれるものと思います。この復刻に続いて『自然』も復刻され、学問研究がいつそう豊かになることを期待します。

日本側の分析した中国の「精神的抗戦力」のレポート

小黒浩司

(土浦短期大学専任講師)

『中国文化情報』の創刊は、盧溝橋事件を目前にした一九三七年五月。日中関係が最悪の局面

第6号(昭和13年4月より)

目次

一、事變後に於ける研究並に一般文化機關

甲、研究機關

- 1 南京國立中央研究院並に其各研究所、2 中山文化教育館
- 3 南京國立中央農業試驗所、4 南京蠶桑試驗場、5 實業部中央農業試驗所、6 南京蠶桑試驗場、7 明孝陵
- 8 中央國術館、9 南京陸地測量總局、10 上海中國科學社、11 上海中國科學社
- 12 上海市立漁業指導所、13 上海江蘇省立漁業試驗場、14 上海
- 15 上海經濟委員會調查所、16 鎮江北固山氣象台、17 長沙經濟部地

乙、學會及び其他

- 1 中國地質學會、2 南京標準委員會、3 管理中英庚款董
- 4 會、5 北京、中國留日同學會、6 北京國立文物機關保管委員
- 7 前北京地方維持會の國立各級學校保管委員會、8 附記一
- 9 附記二「東亞研究所新設か」

丙、博物館並に陳列所

丁、圖書館並に圖書室

- 1 南京國立中央圖書館、2 南京市立圖書館、3 南京江蘇省黨部圖書室、6 國民政府圖書館、7 行政院圖書館、8 司、圖書館、11 內政部衛生圖書室、12 外交部圖書館、13 教育圖書室、15 全國經濟委員會圖書室、16 蒙藏委員會圖書室、17 上海市圖書館、19 杭州浙江省立圖書館並に其孤山分館、20 嘉定縣立圖書館、23 常熟縣立圖書館、24 蘇州江蘇省立圖書館、25 江陰縣立圖書館、28 武進、縣立圖書館、29 武進冠英茗吉、鎮江圖書館、32 國立北平圖書館善本の南送

目次

一、「孤島」上海文化界の動向

- 一、「孤島」文化の一般的趨勢
- 二、教育界「附、上海現存大學、專科學校一覽表」
- 三、學術界
- 四、出版界
- 五、新聞界
- 六、文藝界
- 七、演劇・映畫界
- 八、新文字運動に就て
- 附、香港の文化界情況

一、新政府頒布の民國廿八年國民曆

一、維新政府治下各地新聞の概況

- 1 南京新報、2 江南日報、3 蘇州新報、4 蘇州晚報
- 8 新錫日報、9 新嵐山日報、10 武進日報、11 湖州新報
- 寧更生日報、15 嘉定新報

すいせんします(順不同・敬称略)

を迎えつつあった当時において、誌名に「支那」を用いなかったこと自体が、ひとつの見識といつてよい。それは同誌に二年先行する、竹内好ら中国文学研究会の『中国文学月報』と、ある種通ずる姿勢を示しているように思える。

同誌の目的はそのタイトルの表す通り、最新の中国の文化・教育情報を、日本に伝えるところにあつた。日中全面戦争下、同誌は親日政権のみならず、蒋介石政権など抗日側を含めた「中国」の、教育・文化界の状況、知識人・学生の動向など、多種多様な情報の提供に力を尽くした。それは日本側の分析した、中国の「精神的抗戦力」のレポートと換言し得るのではなからうか。従来の日中戦争期の研究は、政治・軍事面からのアプローチが中心となってきた。だが昨今の世界情勢は、それらを左右する「民族」の力の存在を見せつけている。『中国文化情報』は、同時期の両国関係の考察に新たな視角を提示する、貴重な資料であるといえよう。

『中国文化情報』の位置

岡村敬二 (大阪夕陽丘図書館司書)

上海自然科学研究所の活動や刊行物は『要覽』や『十周年紀念誌』によりその概要をうかがい知ることができるとりわけ注目したのは昭和一二年に発刊された『中国文化情報』の刊行であつた。これまでわたしはこの『中国文化情報』を三つの文脈で参照した。ひとつめは戦時下中国での図書館や研究機関の存在や実情を確認するため『書香』掲載の満鉄各図書館紹介や北京近代科学図書館『書滲』連載の「北支の図書館」とともにこの『中国文化情報』の各種文化機関の現状報告を、ふたつめは日中戦争開始後に新城新蔵所長の提唱で始まった中国の書物や文物・標本の「接収保存」の実態を調べるために、みつめは戦前期中国での日本研究状況を見るため北京近代科学図書館の「中国人日本研究図書展観」目録などとあわせて『中国文化情報』一五号の「民国以来日本科学関係書の華訳考」をそれぞれ参照した。このように調べを進めるにつれてこの上海自然科学研究所が中国での文化・科学・情報活動の中核をなしていたのだとの考えを一層強くしたのであつた。『中国文化情報』の記事内容はそうした研究所の位置を象徴的に言い表していると思う。

抗戦初期の中国科学界の実情を克明に伝えた雑誌

林 一 (昭和薬科大学教授・科学史)

中国近代医学史の重要な側面は、伝統医学をどう扱うかであつた。中西医学の軋轢、融合は日本の場合の漢洋医学の争いに似ていなくはない。順調に近代化が進めば、いずれ伝統医学は、日本の場合と同じように、抹殺の憂き目にあはずだった。医学を含め科学の面での中国の近代化の試みが一つの高みに上ろうとしていた矢先、それを挫いたのが日本の全面的な侵略だった。その転換期である一九三七年に、上海自然科学研究所編の『中国文化情報』が刊行された。抗戦初期の中国の科学界の実情を戦線の両側にわたってできるだけ克明に冷静に伝えようとするこの雑誌には、上記研究所医学部の活動にとどまらない医学薬学の発展の貴重な一時期を特異な角度から眺めた記録が残されている。我ながら偏った興味だろうが、その後の中国医学の新たな展開を予想させるものがあつたのか、あればあつたで、なければないで、その事実をぜひ確認してみたものだと思つている。

『中國文化情報』全31冊の主要記事目次一覽

- 一、 中国科学界ノ展望(一)〜(八)
- 二、 物理学界ノ化学界ノ地質学ノ地理学ノ生物学ノ医学界ノ薬学界
- 三、 科学名詞統一運動略史
- 四、 中華医学界概況
- 五、 全民国ニ於ケル學術機關及ビ団体ノ概況
- 六、 支那事変中ニ於ケル文化界ノ動勢、特ニ中国紙ニ報ゼラレタル教育界ノ消息
- 七、 支那事変中発行ノ中国救亡雜誌
- 八、 中国各大学、学院及ビ専科学校ノ現状(一)〜(六)
- 九、 戦時下の教育ノ施設並ニ救済(一)〜(二)
- 十、 学生ノ動態(一)〜(三)
- 十一、 戦時文芸界及び一般文化界ノ動向(一)〜(二)
- 十二、 出版界ノ消息
- 十三、 中国教育並ニ一般文化界知名ノ士ノ動靜(一)〜(四)
- 十四、 事変後に於ける研究並ニ一般文化機關(一)〜(二)
- 十五、 中支戦区内に於ける文化財ノ保存工作(一)〜(二)
- 十六、 北京文化界ノ現況
- 十七、 事変前後に於ける上海中国人中、小学校ノ学校数並ニ学生数ノ増減に關する調査
- 十八、 現在の教育、研究其他一般文化機關地方別一覽表(上)(中)(下)
- 十九、 中国に於ける中等学校ノ化学教育概況
- 二十、 新学制施行以来ノ中国教育思想ノ變遷
- 二十一、 上海教育界ノ動向ト「学潮」問題
- 二十二、 中国に於ける科学發達史資料(一)〜(三)
- 二十三、 奥地図書館ノ態動(一)〜(二)
- 二十四、 十年來ノ中国留外学生及び最近に於ける留米学生統計
- 二十五、 中国寄生虫学ノ發達ト其将来
- 二十六、 中国に於ける研究機關並ニ学会協会等ノ近況
- 二十七、 民国以来ノ中国天文界工作概況(一)〜(二)
- 二十八、 重慶側文化機關ノ現況(一)〜(二)
- 二十九、 国民政府ノ華中に於ける教育概況

中國に於ける科學發達史資料(一)

本篇は超然の原作(民國二十九年二月出版の「學術」第一編掲載)によるもので、太古傳說時代より現代に及ぶ中國に於ける各種技術並に科學の發達につき、其實料を略々年代順に列挙したものである。内容は、A項「傳説時代の發明」として洪水以前の發明、洪水以後の制作(文字、衣裳、治水、治厩、國土區劃と地圖を含む)、B項「建築工務の發明」として路、築城、宮庭、考工記、C項「機械の萌芽」には地動儀、醫學、數學、木牛流馬、奇器、運天儀、地圖、D項「應用科學の發達」には天算儀象、輿地、羅夜印章、羅盤、胸衣、茶葉、火藥、磁針盤、水梯、水利漕運、蠶桑、E項「歐洲科學の輸入」には算術、天文儀象、奇器圖說、本草綱目、天工開物、物理小識、火器、陶器、漆器鑄器、靛原寺塔、羅書と游學、機械、電氣機械、鐵道、探礦、F項「科學の普及化」には交通、郵政、動力、農業、氣象、醫藥、地質と考古、生物學、物理化學等々を包括してゐる。之等の資料は、種目に於て廣範圍なること、年代に於て太古より現代に及んでゐることが本篇の特色であるが其引用文獻中、古代の部分に對する眞實の校勘、著述年代の査定及び後代に於ける附會有餘の校勘に關し原著者は之が考證を殆ど試みて居らぬ。甚しきは明らかに虚構、捏造の文獻であるにも拘らず、何等の批判なしに眞實のもの如く引用してゐることは本篇の缺陷である。尙ほ原著には極めて多くの誤植が見出されたのは甚だ遺憾に堪えない。

如上の缺陷のため、之れを編譯するに當つては多大の注意を拂つたのであるが、資料全部に對する考證並に年代別等に關する校勘は、勿論短日月ではなしに送らざるべきではないが、已むを得ず其儘々譯載した個所も少くない。仍而本篇は單なる一參考資料として紹介するに止め、其完形は後日に期せねばならぬのである。因に戦近二十餘年來の中國科學界の發達状況に關しては、本情報創刊後より第廿一號に亘る「中國科學界の展況」項について参照されたい。

序 言

中國に於ける科學の發達は、上古より最近二十餘年前迄は甚だ緩慢ではあつたが、その芽生えとしては速く太古に溯り得る。

二五

民國以來日本科學關係書の華譯考

序 説

中國に於ける科學書の翻譯史は、周昌壽氏の「譯刊科學書籍考略」(「張菊生先生七十生紀念論文集」所載、民國廿六年一月刊行)によれば、略々三期に分けて説明されてゐる。第一期は明末より清初、第二期咸豐より清末、第三期民國以後現在に至る迄とする。第一期の翻譯は概して歐米宣教師等の口授に基き中國人が之を漢文に書き直したものであつて、その第一部は Eudie eleonarium 十五卷の内、始めの九卷を徐光啓と伊太利人 Matteo Ricci (利瑪竇)とが協力の許に、明の萬曆三十五年(1607)に出版したものである。第二期に至り當初は依然として歐米人の唱導で着手されてゐたが、間もなく中國人自身で洋書の漢譯を始め、譯者部数は第一期に比し著しく増加してゐる。論說・雜著・天文・氣象・數學・理化・博物・地理等各部門に亘つて總計四百六十八種の譯本が出た。その中には我が藤田豐八氏の日譯した「物理學」(一九〇〇年、江南製造局出版)を王季烈氏が漢文に再譯したもの、矢津昌永氏著の「中學萬國地誌」(一九〇四年、益善書學會出版)が洋學生編譯所の手で漢譯されたものを含んでゐる。

第三期の民國以後今次事變前に至る間に於ける譯書の出版は四百九十五種に達して居る。そして夫等の殆んど全部が中國人の自力に依り翻譯されたものであり、日本科學圖書の譯出されたものも非常な増加を示してゐる。第二期のものが概して中學程度に止まり、教科書用の程度を出ないのに反し、第三期に至りて、高等科學に進展し譯書の種類も多方面に亘り出版されるに至つたのである。

周昌壽氏の調査では第三期に漢譯された自然科學書を七種類に大別し(1)科學總論、2)天文及び氣象、3)數學、4)物理學、

一六

近現代中国の教育史、科学史、日中関係史、植民地研究に不可欠の学術情報誌である。

日本植民地文化運動資料⑥〔7月下旬刊〕

中国文化情報

全6巻 別冊1

上海自然科学研究所編

▼収録内容

- 第1巻 第1号(昭和12年5月)〜第7号(昭和13年5月) 全7冊
 - 第2巻 第8号(昭和13年6月)〜第11号(昭和13年10月) 全4冊
 - 第3巻 第12号(昭和13年11月)〜第15号(昭和14年3月) 全4冊
 - 第4巻 第16号(昭和14年6月)〜第18号(昭和14年9月) 全3冊
 - 第5巻 第19号(昭和14年11月)〜第25号(昭和15年9月) 全7冊
 - 第6巻 第26号(昭和15年11月)〜第31号(昭和16年12月) 全6冊
- 別冊 解題―阿部洋(福岡県立大学教授)・総目次

▼刊行概要

体裁―A5判/上製クロス装/函入
 頁数―総2,560頁
 抽定価―1,111,240円

次回刊行「日本植民地文化運動資料⑦」
 満洲帝国協和会編

協和運動

全20巻/別冊1

体裁―A5判・B5判/上製クロス装/総約9,500頁
 解題―風間秀人
 抽予価―418,180円
 刊行予定―'94年9月〜'95年12月 全5回配本

(1994, 5)

戦前の植民地文化を知る手がかりとなる基礎資料の発掘

日本植民地文化運動資料

植民地満洲の学術・出版の実相を克明に記録、昭和激動期の文化状況を伝える総合書評誌！

1 書香

全6巻・別冊1/満鉄大連図書館編
 大正14年4月〜昭和19年12月 全10冊
 抽定価144,200円

本誌の内容は、大連を含め各満鉄図書館の活動の記録、中国新聞図書案内、満洲の出版界の動向、北アジア大陸の諸文化、関東軍の動向に関連した情報、本邦書籍の書評、各種の文献目録等多岐にわたる。満鉄図書館史はもとより、満洲史、中国史、軍関係史、アジア史研究にとって資料の宝庫。

満洲文芸、北方文化に関する貴重な記事・作品、文献・資料の紹介に努めた総合文化誌！

2 北窓

全5巻・別冊1/満鉄哈爾濱図書館編
 昭和14年5月〜昭和19年3月 全26冊
 抽定価82,400円

満洲学芸史研究上、重要な意味を持つ本誌は、満鉄傘下の一図書館の枠を超え、在満邦人の知的要求に応えた高級でモダンな総合文化雑誌であった。その内容は歴史・民俗・芸術・教育・出版・書評など、満洲における文化事業の全般に及び及ぶ。

東北アジア史研究、衛藤利夫個人研究に必須の基礎資料！

3 収書月報

全6巻・別冊1/満鉄奉天図書館編
 昭和11年2月〜昭和18年9月 全91冊
 抽定価135,000円(6月刊)

本誌の特色と内容は、何よりも館長衛藤利夫の個性と情熱によって収集された密度の濃い蔵書群を反映している点にある。その密度の濃さはよく、満蒙・シベリア等辺境研究図書に表われている。質量ともに充実したこれら資料を駆使した多数の研究論文や書録、雑誌解題や紹介は、東北アジア史研究に不可欠。

満洲文化の向上を企図して刊行した唯一の読書雑誌

4 満洲讀書新報

全2巻・別冊1/満洲読書同好会編
 昭和11年1月〜昭和20年4月 全95冊
 抽定価41,200円

本誌は満洲における読書文化の発展に貢献することを使命とし、満洲の文化人に発言・寄稿の場を広く提供し、その誌面は満洲の出版界・読書界・図書館界の動向はもとより、随筆、書評、書誌、読書論、古本趣味、図書紹介等極めて多岐で、興味はつきない。

日本植民地最大にして戦前では日本最大の図書館報、待望の完全復刻版！

5 文獻報國

全12巻・別冊1/朝鮮総督府図書館編
 昭和10年10月〜昭和19年12月 全102冊
 抽定価247,200円

本誌は、日本植民地最大の社会教育施設の機関誌として、また文献保存及び重要社会政策であった民衆の教化(皇民化)を目的として大きな役割を担った。その誌面からは随所に植民地政策が読みとれる。「侵略と文化」を考へる上で欠かせない原資料である。